〈資料〉

資料 下里泰徳編「宮古マラリア追憶記」（その一）

崎　浜　　靖（沖縄国際大学）
鈴　木　厚　志（立正大学）

この資料は、1920年代後半から1960年代にかけて、沖縄県宮古島に存在した熱帯熱マラリア有病地における防遏対策とその活動の記録である。記録は、宮古マラリア防遏所（現在の宮古保健所）に勤務した伊是名信貴氏（故人）と下里泰徳氏（故人）により、執筆と編集がなされた。筆者らは、下里泰徳氏の友人であった小禄恵良氏をとおし、この資料を預かり、この度、本誌資料として掲載する。本資料は、三つに分けて掲載予定であり、その一では、アジア太平洋戦争以前の記録を掲載する。

１．解題（その一）

１）資料の概要と構成

筆者らは、これまで約20年間にわたり、近代期宮古島のマラリア有病地の地理的環境と防遏対策をテーマとして研究を進めてきた。本誌に掲載する資料は、宮古島市東仲宗根添において現地調査を進めるなか、筆者の崎浜が、沖縄国際大学南島文化研究所による旧平良市の調査で知り合った長濱幸男氏をとおして、かつて県立宮古農林高校（現宮古総合実業高校）に勤務していた小禄恵良氏（東仲宗根添出身）と知り合い、その小禄氏より提供されたものである。筆者らは、資料内容を確認し、その一部を分析・考察して研究発表も実施した（鈴木 2015・2017）。そのいっぽう、提供された資料全体を活字資料として残す重要性を認識していたものの、実行できずにいた。この度、本誌「南島文化」の資料として掲載することにより、八重山のマラリア研究に比較し、史資料や研究蓄積の少ない、これまでの宮古島のマラリア研究に、僅かながらも貢献できればと思う。

宮古島におけるマラリアをめぐる既往研究には、医学・感染症研究の立場からマラリアの歴史とその対策を論じた研究（稲福 1979・1995; 大鶴 1998; 沖縄県宮古島医療史編纂委員会 2012 ; 崎原他 1996）、マラリア媒介蚊の生態に関する研究（岸本他 1985; 田中他 1959 ; Toma et al. 1996 ; Miyagi et al. 1996）、マラリアをめぐる地域史的研究（稲村 1972・1977 ; 平良市 1978・1979; 宮永1967）、そして地理学・環境史的研究として（小林 2003・2005; 崎浜 2000・2003・2010; 仲松 1942・1964; 的場 1937）などがある。

本誌で紹介する資料は、アジア太平洋戦争以前の宮古マラリア防遏所、宮古民政府・群島政府時代は宮古マラリア防遏所防遏課長、そして後に防遏所長へ昇任する伊是名信貴氏（故人）と、その指示の下に業務にあたった下里泰徳氏（故人）により記録・編集されたものである。下里氏は、1949年4月末日より宮古マラリア防遏所に勤務し、1952年の琉球政府発足後の宮古保健所においても、衛生官吏としてマラリア防遏業務に取り組んだ。同氏は、1957年より開始されたウイラープラン下のDDT散布作業等に最前線で関わ

り、1960年の宮古島におけるマラリア防遏達成と、その後の同島における公衆衛生に深く関わった（沖縄県衛生監視員協会, 1986）。両氏による資料には、宮古島における熱帯熱マラリアの発生からその地域的拡大、行政と住民による防遏対策、そしてマラリアと対峙してきた住民の生活そのものが記録されている。その内容は、既往研究に散見されるような、島外の研究者や行政担当者等によるものとは異なり、同じ宮古島に生活する者の視点でとりまとめられ、かつ客観的事実に基づいている。そのため、今後の人文・社会科学系の論考にも十分耐えうる内容といえる。

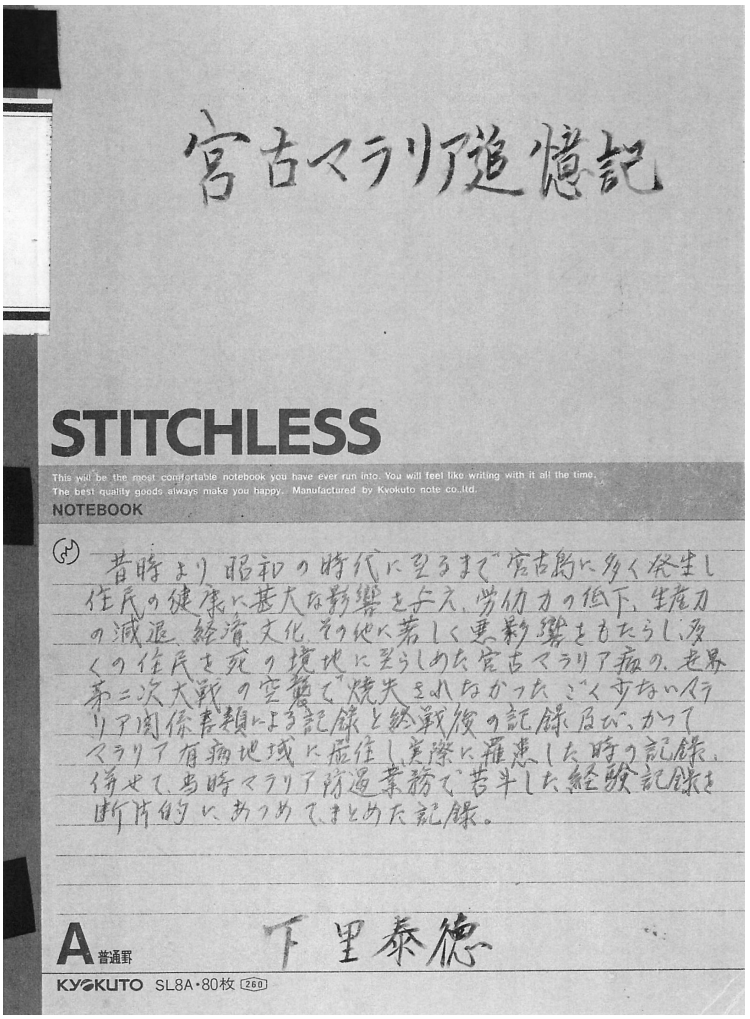

写真１　宮古マラリア追憶記 表紙

以下は、本資料に記載されていた伊是名信貴氏と下里泰徳氏の略歴と写真である。なお、年号の表記は資料の記載に基づく。

伊是名信貴　明治30年10月20日生　八重山　石垣市

明治44年3月　八重山 登野城尋常高等小学校卒業

大正10年2月　沖縄県巡査教習所卒

昭和3年5月以来、宮古マラリア防遏所、専務巡査、県検疫雇、防疫監吏としてマラリア防遏業務に専念従事し終戦となる。終戦後も宮古民政府、宮古群島政府の下に引続きマラリア防遏係、防遏課長、防遏所長等の名称で1959年9月まで宮古マラリア防遏業務一筋に従事専念した。

下里泰徳　大正13年10月30日生　平良市字東仲宗根添（番地削除）

昭和19年3月　沖縄県立宮古中学校卒

1949年4月30日より1962年9月までマラリア防遏嘱託マラリア防遏技手として同業務に従事す。以後宮古保健所衛生視吏員として勤務し、昭和56年同所退職。

ここで紹介する資料は、以下に示す内容より構成される。資料内容を三つに分割し、本誌に掲載する予定である。ただし、時代区分に基づき掲載する関係から、以下の資料構成は、下里氏の編集した資料掲載順を若干変更している。また、資料中、題目のないものについて、筆者らが補った箇所（文中の＊）が複数ある。

資料 下里泰徳編「宮古マラリア追憶記」の構成

1．アジア太平洋戦争以前の対応*〈その一〉

1）表紙の前文

略歴

2）序文

3）「宮古群島に於けるマラリアの沿革」

①宮古マラリアの沿革〈徳田安弼〉

②宮古マラリア防遏所設置に至る経緯〈伊是名信貴〉

③嘆願書〈伊是名信貴〉

④マラリア防遏所 当時の作業〈徳田安弼〉
⑤「マラリア」の撲滅法 本(島の)*実施状況〈伊是名信貴〉
・蚊族に対する措置
・マラリアと耕地事業との関係

2．民政府・群島政府時代の対応*〈その二 掲載予定〉
下里氏による記録*
①宮古マラリアの概要*
・マラリアとは
・宮古群島の位置と地勢
・宮古島のマラリア病
・宮古マラリア防遏所の設置
・宮古マラリア防遏機構
・マラリア有病部落名（地図有り）
・マラリア防遏作業内容（表有り）
・マラリアの治療と予防薬品（表有り）
・アジア太平洋戦争中の防遏作業*
②マラリア患者の発生状況*
表 マラリア患者発生状況と死亡者数
表 マラリア患者数 開業医からの届出
表 脾腫指数
表 （地域別）マラリアによる死亡調

3．人びとの語る宮古マラリアとの闘い*〈その三 掲載予定〉
1）宮古マラリアとの闘い*
①宮古島のマラリア防遏と伊是名信貴先生〈下里泰徳〉
②宮古マラリア防遏の想い出〈伊是名信貴〉
③マラリア防遏の想い出〈豊原秀夫〉
④マラリア防遏の想い出〈下里泰徳〉
⑤沖縄戦当時の宮古島のマラリア〈瀬名波栄〉
⑥宮古におけるマラリア その発生と経緯〈久貝徳三〉
「宮古タイムズ」掲載記事より*
i 袖山部落 死の恐怖（昭和46年10月2日掲載）
ii 袖山救済に全力集中（昭和46年10月16日掲載）
iii 昭和21年11月6日の宮古タイムズ紙報道内容
⑦世界第二次大戦当時のマラリアの思い出〈下地ヨシ子〉
2）マラリア防遏作業貢献者

＊：筆者補筆

２）資料入手の経緯

2014年9月下旬、筆者の崎浜はマラリア有病地の調査を行うために、宮古島市（旧平良市）職員で東仲宗根添在住の長濱幸男氏宅を訪問した。長濱氏とは、1995年8月に実施した沖縄国際大学南島文化研究所による旧平良市での調査以来の対面であった。

長濱氏の自宅にて、アジア太平洋戦争以前におけるマラリアと住民生活との関係について聞き取りを行うなかで、マラリア防遏に詳しい東仲宗根添出身の小禄恵良氏を紹介して下さった。小禄氏は元県立宮古農林高校（現県立宮古総合実業高校）の教諭で、宮古島の地域研究を行ってきた郷土史研究者であった。

その後、筆者の崎浜は、自身がこれまでまとめた東仲宗根添におけるマラリア有病地と地理的環境に関する論文と資料等をもとに、小禄氏より、マラリア禍の集落の状況について、貴重な体験談を伺うことができた。小禄氏は伊是名信貴氏と下里泰徳氏のまとめたノートや地図類を見せながら、宮古島のマラリア防遏についての下里氏の功績と人柄を詳しく説明した。

小禄氏は下里泰徳氏の家族より、マラリア防遏に関連する資料を託されており、崎浜はこれらの資料を見ながら、ぜひ研究のための資料としてお借りしたい旨の話をすると、資料の管理を崎浜に委ねたいと申し出られ、これら一式を預かることになった。以上が、下里泰徳氏による「宮古マラリア追憶記」を本誌に掲載する経緯である。

２．資料

１.アジア太平洋戦争以前の対応

１）表紙の前文

昔時より昭和の時代に至るまで宮古島に多く発生し住民の健康に甚大な影響を与え、労働力の低下、生産力の減退、経済、文化その他に著しく悪影響をもたらし、多くの住民を死の境地に至らしめた宮古島マラリア病の、世界第二次大戦の空襲で焼失されなかったごく少ないマラリア関係書類による記録と終戦後の記録及び、かつてマラリア有病地域に居住し、実際に罹患した時の記録を併せて、当時マラリア防遏業務で苦闘した経験記録を断片的にあつめてまとめた記録。

略歴〈１の１）に記載〉

２）序文

私は昭和24年から昭和37年まで宮古群島のマラリア防疫係職員としてマラリア防遏業務にたずさわった者であります。

浅学非才な者ですが、在職中多くの有識ある諸先輩、同僚、友人達に恵まれご指導ご援助を数多く拝受する事が出来、お蔭さまで13年の長い年月を大過なく同業務に専念し、宮

古群島のマラリア病撲滅の暁を見る事が出来た事を、マラリア防遏業務にたずさわった皆様に心から感謝と敬意を表す次第であります。

昭和34年（1959年）9月、私の大先輩伊是名信貴氏（八重山石垣市出身）が宮古保健所から八重山保健所へ転勤なされた時、伊是名氏より私に引継がれた小冊子「宮古群島に於けるマラリアの沿革」（次節に掲載）がありました。世界第2次大戦という最悪の中、米軍の空襲が頻繁だった戦果を乗り越えて、貴重に保管してこられた伊是名氏に感謝しつつ、その小冊子を拝読しました。それには宮古群島に於けるマラリアの沿革、概況が断片的に記入され、就中、昭和2年宮古群島マラリア防遏所設置当時以来の各種防遏作業状況及び患者数死亡数等が詳しく記されている事には興味を覚えました。

永い年月を経て大切に保管された同小冊子、貴重な記録、決して粗末にするまいと考えました。その後諸先輩や同僚の皆さんから「宮古群島に於けるマラリア防遏に関することについては君の方でぜひまとめてくれないか」と幾度もすすめられたが、ペンを執ったら自信に欠ける日々でした。しかし今度思いきってこの記録をまとめる決心をしたのでございます。それは私が宮古群島に於いてその昔猛威を発して発生し続け、多くの人達の命をなくし、はたまた衰弱に追い込み、同島の産業、文化、経済面で少なからぬ損害を与え、宮古島民を苦しみのどん底に追い込んだマラリア病を後世に伝えると共に、宮古保健所が成し遂げたマラリア撲滅の作業は公衆衛生上の見地からしても、フィラリア撲滅と共に一大業務の遂行の面で同保健所の歴史上、大きな功績として末永く誇り高く評価され、後世に引き継がれなければならないと考えたからであります。世界第2次大戦中に昭和2年8月マラリア防遏所設置以来、大切に保管されていた宮古群島に於けるマラリア防疫関係書類は殆んど焼失され、同病の詳しい記録は殆んど皆無と言ってよい程ですが、伊是名信貴氏の記録と、私の在職中の記録をまとめただけのみです。

いろいろ不備な点も数多く指摘される事と思いますが、良識ある読者各位の英知でご理解戴ければと思うのでございます。

3）「宮古群島に於けるマラリアの沿革」

①宮古マラリアの沿革

初代防疫監吏　徳田安弼氏の記録

宮古郡の「マラリア」は其の紀元根拠となるべき記録存ぜざるを以て知るに由なしと言えども、隣群八重山は口碑によれば紀元2191年（天文年間）和蘭船が西表島仲良港に漂着せし以来一種の熱性病流行したるが、これ即ち八重山郡に「マラリア」の侵入したる始めとされ、また明治43年地方病調査部長中川恒次郎氏の調査記録によれば古記の伝ふる所今より200年前既に風土病たる「マラリア」流行せるものの如し。

本郡は八重山におくれて発生したるならんも果たして何時頃なりしや詳かならず。

平良町東仲宗根添は古くより「マラリア」の根元地と称せられ、今尚小部落処々に点在し、廃絶家の跡又は部落絶滅の形跡至る所にありて廃墟の残跡を見る時は昔時「マラリア」

の如何に惨禍を逞うしたるかを偲ばしめ実に凄惨たる感あり。

記録の伝ふる所によれば、同地方は宮古史実と深き関係を有するものの如く昔時を村邑盛んにして英雄割拠し互いに雄を決し覇を争いしとの事なれば、古代は今日の如く「マラリア」の病根地にあらざるが如く考察せられ、なお今より500年前与那覇勢頭豊見親は同地方の北海岸の白川田浜という所に於いて７日７夜の祈願を立て同所より出航して、沖縄本島を発見し中山に至り察度王に帰順して、宮古島をその版図にしたる事は史蹟により明かなり。

されば同地方は正しく昔時文化の発祥地たりしに相違なく近代の如く荒廃不毛にして「マラリア」の有病地帯にあらざりしものと思惟せらるるも古老の口伝によれば同地方の「マラリア」は近年流行したものにあらずして少なくとも100年前より流行し、しばしば蔓延猖獗を極めたるものの如し。本郡の「マラリア」は八重山及び台湾に属す。（昭和11年記）

以上徳田安弼初代防疫監吏が述べておられるように宮古島の「マラリア」は1522年仲曽根豊見親が与那国の鬼處を従代して以来宮古島は八重山との交流を深めてきており、宮古島のマラリアも八重山におくれて天文年間か天正年間に八重山から平良町北部海岸の白川田浜を経由して、平良町東仲宗根添に侵入して流行したものと思慮される。従って、今から300年以前から発生したのではないかと考えられる。

②宮古マラリア防遏所設置に至る経過

旧宮古マラリア防遏所長　伊是名信貴

本郡の「マラリア」は八重山島に於けるよりも良性で殆んど熱帯熱を見ざるものと島民も信じ、郡民有志並に開業医に於いてもこれを重大視せず看過し去り専門家の著書に於いてすら熱帯熱は我が国に於いては台湾および八重山島にこれを見るものとし殊に大正9年3月内務省保健衛生委員にして棋界の権威者たる宮島医学博士は栃原、田辺、両嘱託と共に八重山へ調査の途次、本郡「マラリア」の概要を調査したる結果1か月平均の患者数僅かに25名に過ぎざるを見、且、小学児童10名の検血の結果1名の「マラリア」原虫保有者を発見し「本郡マラリアは流行地局限し病毒も又濃厚ならず」と判定したるが如し。故に県当局に於いても従来梢軽視し居りたるやの観ありき。

然るに大正15年9月県衛生課に於いて本郡平良町字東仲宗根添に於ける「マラリア」調査及びこれが予防撲滅の臨時的措置を講じているに際し、城辺村、下地村の一部に於いて腸チフス類似の熱性疾患流行の兆しあり。併せて調査の結果「熱帯熱マラリア」なる事を確認した。爾来警戒中なりし由なるも時恰も農繁期に際会し、村民一般も他を顧みるの暇なき間に病毒は殆んど宮古本島の大半を侵襲し、一町二ヶ字、三十ヶ字中に於いて14ヶ字が有病地帯と化し、昭和2年1月に患者895名、大正15年1月以降累計2,197名（マラリア類似患者を含む）死亡202名の多数を算し、其の半数は医療を受けること能わざるのみならず、医療を受けても継続服薬を為さざるを以て原虫保有者はますます増加するのみにて由々しき状態を惹起しつつありとの報告に接し、県衛生課に於いては昭和2年1月技術官2

名助手2名派遣して、これが予防撲滅とその真相調査に着手した。其の結果参集又は臨床採血によりて得たる血液標本950本中病原体の種別についてみるに流行地全般を通じその約半数は熱帯熱原虫を証明したりと（熱帯熱47.28%　三日熱36.28%　四日熱16.44%）なお「マラリア」に症状類似たるものありて然も数回の検血上「マラリア」原虫を発見し得ざる一種不明の熱性疾患の混在するものあるを認めたりと。よって当時の県衛生課長は前後2回にわたり有病地の視察をとげ、本郡「マラリア」は各種混在なれども主として熱帯熱「マラリア」なることを認め、宮古本島に防遏所を設置し、これが予防撲滅に努力すると同時に混在する不明の熱性疾患の原因及び予防の方法を研究確定し、これが根絶を期すべき必要ありとし其の対策を講ぜられ、昭和2年8月遂に宮古マラリア防遏所を設立するに至れり。

③嘆願書（昭和11年）

伊是名信貴

本郡「マラリア」は従来土地限局的にして良性「マラリア」のみと見做とされたるに、精密調査の結果、各有病地に熱帯熱（悪性マラリア）存在し、なお宮古本島の大半を侵襲し「マラリア」有病地と化し、特に10年前より各地に蔓延猖獗を極めたるも、当所設置後徹底的に治療を施すと同時に防蚊、駆蚊の作業に極力各字を指導督励して断行せしめたるため昭和4年より著しく効果を挙げ患者は激減し、有病地住民も大いに自覚して県の施策に深く感謝し熱心に作業に従事し居る現状にて今や「マラリア」による恐怖感も全く一掃せられ「マラリア」防遏区域内に於ても大半は殆ど無病地たるの状態に至れり。一例を挙げれば平良町字東仲宗根添は本郡「マラリア」の根據地と称せられ、昔時より、しばしば「マラリア」の惨禍を蒙り近年に至りても大正15年より昭和3年まで猛烈に蔓延したるも字民は大いに自覚し「マラリア」予防組合も模範的に作業等に活動し効果最も顕著なり。

昭和11年5月1日現在患者7名に過ぎず字民の健康も大いに快復し、昭和4年秋期学区青年競技に於いて見事優勝旗を獲得し且青年処女の学事成績にも優勝しその他納税成績、小学校生徒の出席も好成績を挙げ殊に産業方面は著しき発展をなしつつあり。然れども「マラリア」の根本的撲滅は困難なる大事業にして本部に於ける「マラリア」も全く根絶したるに非らず。

各字に原虫保有者数名ずつこれを見ており、又、「マラリア」を媒介する蚊族も、なお各有病地に存在するを以て尚一層徹底的治療を施して、発病者並に保有者を皆無ならしめ一面蚊族絶滅を期する作業を常時断行する要あり。特に排水工事の遂行と、耕地整理の事業は緊急を必要とするを痛感する実情なり。単に患者の減少を以て直ちに「マラリア」は根絶したりと看做すは早計にして防遏作業の縮小を考慮した場合再び「マラリア」は流行蔓延して猖獗を極る事火を見るよりあきらかにして折角の計画を功績を水泡に帰せしむる結果に終らん。即ち郡民、有志、此の点を理解し挙郡一致「マラリア」の根本的撲滅に一層援助努力すべき要あり。県及び国としても本郡の保健衛生及び産業開発上、深甚なる考

慮と最善方策を講ぜられんことを切望して止まざる所なり。

④マラリア防遏所当時の作業

旧防疫監吏　徳田安弼

１．脾腫患者に関する調

昭和2年8月より同年3年7月にわたる約1カ年間に「マラリア」発病者検診並　に定期献血の際一般的に検診の結果脾腫腫大せる者878人に及び字別に見ると字長間の167人を最高とし、次は字東仲宗根添の136人にして、字川満125人、比嘉94人、嘉手苅65人、上地54人の順序なり。而して脾臓のはれたる者29人に達し、内6名は硬化し居るを認めたり。かかる脾腫患者に対しては、徹底的に治療法を施し「キニーネ」剤以外亜砒酸等特殊な治療をなし、又検血の結果仮令原虫を発見し得ざる者ありも、「マラリア」の症状ある者は「マラリア」患者の取り扱いをなし居れり。

其の後「マラリア」患者の減少に伴い脾臓のはれた患者も漸次減少し、現今に於ては脾腫患者3名に過ぎず。

２．「マラリア」の予防法（本郡の実施状況）

「マラリア」は昔時の如く、その病原体不明にして、瘴気説或は水説等出でし時代は別問なるも、その病原体（寄生虫にして原虫の部類に属するマラリア胞子虫「プラスモヂウム」）の既に判明し、而して「マラリア」を媒介すべき蚊族も又各国の学者に於て種々研究せられた。

今日に於ては「マラリア」の予防及び撲滅法は理論上は明確たり、然れども実際問題としては、中々困難にしてこれが予防及び撲滅は一大難事業とされ「マラリア」有病地帯、熱帯地方に於ては、大切な命を奪われ、各種の事業に及ぼし、其のため年々多大な損失を蒙り居るを以て各国とも莫大の経費を投じて、これが防遏に努力しおる状況なり。ゆえに疲弊困憊の本県に於てこれを実施するに当たりては、有病地に於ける位置、地形、地勢は勿論民情、風習をも参酌し、なお島民の生活をも考慮し合理的に且、経済的に事実、実行し得る程度に於て最も効果ある適切最善の方法を講ぜざるべからず。

「マラリア」が蚊族（アノフェレス）の媒介によりて感染すること明確なるをもって、その予防法は蚊の咬螫を防ぐにあり。即ち防蚊駆除の方法を第一義とせり。

甲　防蚊法として最も簡単にして而も一般的に施工し効果多きは寐臥の際蚊帳使用これなり。

（イ）防遏所設置当時は、有病地部落民に於ては蚊帳数少なく、又備えあるも、これを使用せざる風習ありたるも予防宣伝に大いに努力したるため、これを使用す者多く年々その数を増し、相当効果を挙げつつあり。然れども事実貧困にして、

蚊帳を購入し得ざる者ありて、予防上遺憾の点あり。これらに対しては、県衛生課に於て計画せる無料貸与の実を1日も早く実現を祈る状態なり。

（ロ）各戸に於て、夕刻より寐臥の際まで、蚊遣剤を燻煙することは、一般予防上相当効果あるも、蚊取線香は宮古工場員及び一部の外全般には経済関係より困難なるを以て蓬草、松葉等の燻煙を励行し居れり。

（ハ）先島方面は昔より暴風の発生地と称せられ、暴風の襲来多かりしため、住家は防風的に二重壁の構造をなし、室内はそのために暗く、蚊の棲息に適合しおる状態なりしを以て、その採光、換気的の改良法を奨励し漸次、各戸明るく、又風通しよく改善されつつあり。

乙　蚊族の発生を防止する事は「マラリア」の根本的予防策たり。その方法としては

（イ）水溜、沼等不要の個所は埋渫せしめる事、特に必要の処は、清水は除草した上「タップミノー魚」を放養する事、汚水の所は毎週石油を投入する。

（ロ）下水路は排水的に築造せしめ、常に浚渫を励行する。

（ハ）空缶、空きびん、陶器類、破片等、雨水のたまるおそれのあるものは厳重にこれを注意し除去せしむること。

（ニ）字又は部落にして湿潤の処は部民総出動して、排水溝を新設せしむる事。既設の箇所は排水的に勾配を付し徹底的に第浚渫せしむる事。

（ホ）字又は部落に近接せる水田はなるべく畑地に耕地替えをなさしむること。必要な個所は除草の上を放養せしむること。

丙　予防宣伝

(1)（イ）「マラリア」予防宣伝ポスターを各市町村役場、各学校警察署、駐在所、各青年会場その他各集合の場所へ貼布し、効果あるを認む

（ロ）予防宣伝ビラを各学校生徒、青年団員、処女会員、各字有志等の頒布。

（ハ）「マラリア」の予防になる小冊を各予防組合、青年会、処女会、各字有志会に頒布。

(2) 本部有病地は農村部落なるを以て文書宣伝はその反響薄く、よって各有病地の戸主会、青年会、処女会、各学校、その他多数集合の場合を利用し、防遏職員及び警察官より「マラリア」予防に関する懇切に予防上の講和をなし効果を挙げつつあるも、一般民衆的に「マラリア」予防に対し興味深く劇的に映写したる活動写真の宣伝、特に必要あるを痛切に感ずる実情なり。

丁　薬剤的予防方法

「マラリア」防遏区域住民全部に対し、予防薬を投与する事は経費の関係上不可能なるも、夏、秋蔓延の兆ある時、特に必要なる有病地部落民全部（健康者）に対し検

診、検血を実施すると同時に防遏所員及び警察官立ち合いの上、塩酸キニーネ大人0.5（年令により、これに準ず）小児は「オイヒニン」を服用せしめ尚5日毎に同様服用せしむる方法は城辺村字新城、長間、下地町字嘉手苅、平良町字東仲宗根添等に実施したるが、新患者の発生を防止し一般的予防上大いに効果あるを認めたり。

⑤「マラリア」の撲滅法　本（島の）実施状況

伊是名信貴

「マラリア」を根本的に撲滅するには「マラリア」発病者並に原虫保有者をして有病地部落より駆除皆無たらしむるか、又これが媒介をなすべき蚊族を撲滅するかにあり。よって「マラリア」発病者並びに原虫保有者に対する措置としては「マラリア」有病地部落に対しては発病者は勿論、健康者全部民を毎月1回乃至2回検血を実施して「マラリア」原虫保有者を徹底的に治療法を実施、即ち塩酸キニーネ大人1日0.75g（年令によりこれに準ず）7日間服用、3日休3日服用の方法を用いて

熱帯熱（悪性）正味3週間以上

三日熱、四日熱（良性）正味16日以上

持越患者及び特殊の患者に対しては1日1ｇを服用せしむ。小児、妊婦、重症患者に対してはオイヒニンを用う。脾臓患者に対しては亜砒酸丸を用う。

予防地域住民に対して、マラリア有病地に於て感染申し出の者に対しては、検血の上マラリア患者と検定されたる時はさっそく施薬し、正規の治療法を施行しおれり。

キニーネはマラリアの特効薬として重要なるマラリア治療剤たる事は論なきも、単に熱発作の治療を行うに止まらず、原虫を消滅せしめ、再発をも永久に防遏し、これによってマラリアの完全なる撲滅を期するには不十分なる点あり。即ち一部の患者に対してはキニーネ療法3週間以上数カ月に及ぶも尚原虫を消滅する事能わず。殊に熱帯熱がメーテン（生殖体）に対しては無力にしてマラリアの根本的撲滅上真に遺憾なりしにマラリア治療剤の新薬此の点にかんがみて遂にキニーネに優る人工合成的マラリア治療剤プラスモヒンがドイツに於て発見調整され、既に台湾中央研究所に於て実験されたりしを以て当所に於ても昭和6年よりその効果実験中なるが、キニーネ剤により、治癒せざる持越患者に対し相当効果あり。特に四日熱、三日熱患者には最も好成績を挙げおるも熱帯熱（悪性）に対しては不十分の点あり。

然るに最近マラリア治療剤の新薬「アテプリン」が発見され幸い副作用なく効果顕著なる幾多の実験報告あり。なおアテプリン及びプラスモヒン併用療法は最も効果ある報あり。当所に於ても目下実験中に属するも確実に効果顕著なる成績を挙ぐる事を得ば是正に治療学上画期的の一大進歩にしてマラリア予防撲滅上貢献する所多大ならん。

・蚊族に対する措置

マラリア病が蚊族の媒介により感染する事明確なるを以てこれが予防並びに撲滅を期す

るにはマラリア患者に対する措置と相俟って蚊族に対する措置最も重要義なり。よって当所に於てはマラリア有病地各部部民に蚊帳の使用、蚊遣剤燻烟の奨励のみに止まらず、蚊族の発生を防止すべく戸主又は青年団､処女団をして積極的に不要の水溜りを埋渫せしめ、下水溝の新設、浚渫又は蚊族の棲息する藪及び家屋周囲の雑木等の伐採を徹底的に断行せしめ、或は防遏所職員直接作業人夫を引率して藪伐採、下水溝浚渫及び排水上必要なる岩石の破砕又は各有病地帯に於ける沼、水溜り、下水溝等タップミノー魚を放養する等防蚊駆蚊の各種作業を断行したるため大いに効果を上げおれり。

例１　昭和3年城辺村字新城に於てマラリア蔓延猖獗を極めたる際、部落民全部に対し検血と同時に予防薬を投与、患者に対しては徹底的に治療法を施行、一面に於ては蚊族夥しく発生せる沼の大浚渫作業と「字」の中央にある拝所の雑木及び家屋周囲の雑木を徹底的に伐採せしめたる結果、患者著しく減少し、現今無病地同様となりおれり。

例２　下地村字嘉手苅本字は昭和2年から同3年頃マラリア流行猛烈を極めたるが、患者の措置と相俟って藪及び家屋周囲の雑木を徹底的に伐採せしめ、なお付近一帯湿潤なりしを以て下水溝の大浚渫作業を施行したるため漸次患者減少し、目下一人の患者なく無病地帯となりおれり。

例３　平良町字東仲宗根添は昔時よりマラリアの根源地と称せられ、しばしばマラリアの惨禍を蒙りたる所なるが防遏所設置当時精密調査を遂ぐるに東方「小字」土底及び瓦原付近一帯は湿潤にして下水停滞し蚊族夥しく発生し居りたるを以て病原これにありとし、早速字民200余名、総出動せしめ、防遏所員、警察官、町吏員の指導督励の下に同所より佐和地原排水溝の上流まで約20余町歩の下水溝を新設せしめ尚年2回年中行事として大浚渫作業を断行せしめたるため、著しく効果を挙げつつあり。「マラリア」の根本的撲滅は単に治療主義のみにては全然不可能にして、蚊族措置と併行的に施行するを要す。然るに県のマラリア防遏所費予算の編成は全く治療主義にして、即ち薬品費のみを計上し、蚊族措置に対する所費は全く計上なかりしを以て当所に於ては昭和5年より約100円を薬品費より減じ蚊族措置として臨時雇人夫賃に計上し試験的に防蚊、駆蚊の諸作業を施行し居るが著しく効果をあげつつあり。マラリア防遏所費、県振興計画費に計上さるる暁に於ては蚊族措置に対する所費相当計上せられん事を痛切に感ずる次第なり。

・マラリアと耕地事業との関係

マラリアの予防撲滅と耕地事業との関係は重要密接の関係を有し、排水工事施行後に於けるマラリアの防遏成績は効果顕著にしてマラリアの根本的撲滅は患者の措置と蚊族措置に対する各種作業を断行し、尚マラリア有病地帯に於ける湿潤の箇所に対し、本格的に排水工事を施行せざるべからず。

参考文献

稲福盛輝 1979.『沖縄の医学』第一書房.

稲福盛輝 1995.『沖縄疾病史』三一書房.

稲村賢敷 1972.『宮古島庶民史』三一書房.

稲村賢敷 1977.『宮古島旧記並史歌集解』琉球文教図書出版.

大鶴正満 1998. 沖縄のマラリアー日本本土,近接する台湾と関連してー.琉球大学附属地域医療センター編『沖縄の歴史と医療史』.

記念誌発行編集委員会 1986.『二十五周年記念 衛生監視業務のあゆみ』沖縄県衛生監視員協会.

沖縄県宮古島医療史編纂委員会 2012.『沖縄県宮古島医療史』（社）宮古地区医師会.

岸本高男・比嘉ヨシ子・村田健司 1985. 宮古島におけるコガタハマダラカの調査.衛生環境研究所所報 19, 50-54.

小林　茂 2003.『農耕・景観・災害 琉球列島の環境史』第一書房.

小林　茂 2005. 疾病にみる近世琉球列島.『沖縄県史 各論編4 近世』沖縄県教育委員会, 539-565.

崎浜　靖 2000. 地籍資料を利用した歴史空間の復原作業（1）ー宮古・東仲宗根添における土地整理法施行時の空間構成ー. 南島文化, 22, 75-85.

崎浜　靖 2003. 地籍資料を利用した歴史空間の復原作業（2）ーマラリア有病地の地理的性格ー. 南島文化, 25, 47-72.

崎浜　靖 2010. マラリア有病地の地理的性格ー宮古島・東仲宗根添を事例としてー.大塚昌利編『地域の諸相ー地域が人を育て 人が地域を創るー』古今書院, 197-211.

崎原盛造・平良一彦 1996. 沖縄におけるマラリア・フィラリア対策史. 琉球大学医学部附属地域医療センター編『沖縄の疾病とその特性』九州大学出版会.

鈴木厚志 2015. 宮古島におけるマラリア有病地の地理的環境とかんがい排水事業の空間表現. 2015年度日本地球惑星連合大会におけるポスター発表, 211-229.

鈴木厚志 2017. 近代期宮古島におけるマラリアと防遏対策ー防遏所勤務者の記録によるー（その2）. 第11回多良間島研究会（沖縄県立芸術大学）における口頭発表.

田中　寛・熊田信夫・福嶺紀仁・川満彦一・伊是名貴信・城間祥行 1959. 過去3年における琉球宮古島のマラリアの変遷ーその疫学と防遏.お茶の水医学雑誌, 7,777-785.

仲松弥秀 1942. 琉球列島に於けるマラリア病の地理学的研究. 地理学評論. 18(4), 49-73.

仲松弥秀 1964. 宮古諸島の地理. 琉球大学沖縄文化研究所編『宮古諸島学術研究報告 民俗・地理編』26-32.

平良市 1978.『平良市史 第4巻 資料編2 近代資料編』平良市役所, 282-283.

平良市 1979.『平良市史 第1巻 通史編 1（先史～近代）』平良市役所, 472-473.

的場益二 1937.沖縄縣宮古郡平良町佐和地開墾事業. 農業土木研究, 9(3), 57-63.

宮永次雄 1949.『沖縄俘虜記』雄鶏社.

Toma, T., Miyagi, I., Takagi, M.and Tsuda, Y. 1996. Survey of *Anpheles Minimus immatures* in Miyako Island, Ryukyu Archipelago, Japan, 1991 and 1995. *Med. Entomol. Zool* 47(2), 167-170.

Miyagi, I., Toma, T., Malenganisho, W. LM, and Uza, M. 1996. Historical Review of Mosquito Control as a Component of Malaria Eradication Program in the Ryukyu Archipelago. Malaria History in Ryukyu Archipelago, *Southeast Asian Jour. Trop. Med. Public Health.* Vol. 27, No.3, 498-511.

Reseach Materials Edited by SHIMOSATO Yasunori : Recollections and Records of Malaria Diseases in Miyako

SAKIHAMA Yasushi, Okinawa International University
SUZUKI Atsushi, Rissho University

This research material is a record of preventing measures and their activities in the diseased areas of falciparum malaria that existed in Miyako Island, Okinawa Prefecture from the late 1920s to the 1960s. The record was written and edited by Mr. IZENA Nobutaka and Mr. SHIMOSATO Yasunori, who worked at the Miyako Malaria Suppression Center (currently Miyako Health Center). The authors obtained this material through Mr. OROKU Keiryo who was a friend of Mr. SHIMOSATO Yasunori, are going to publish it as a research material of this journal. This research material will be divided into three parts which the Part 1 contains mainly records of the time before the Asia Pacific War.